

●第4部 パネルディスカッション

河井 パネルディスカッションに入る前に、会場から佐賀県の川島さんに質問票が2枚出されましたのでご回答いただきます。

まず県民満足度の向上に関して、実際に向上しているかはどのように評価しているのか。もう一点は行政の縦割り解消について、具体的にどのような形が考えられているのか。お願いします。

川島（佐賀県） 満足度の向上をどう測るのか、これは非常に難しいです。実際にやっているのは、行政とNPO・民間企業の方とが新しい協働関係を生み出した事業については、年度の終わりに振り返り評価をやらせてもらっています。担当部局にお願いしているのは、ユーザー満足度評価です。公共サービスの受け手が、サービス提供の担い手の変化（協働化）をどのように評価するか、主観的でもいいので測ってくれとお願いしています。その他、来場者や問い合わせ件数の変化等、定量的なものも測っています。つまり、一義的・全庁的、あるいは部局単位で一定の定量評価方法を決めているわけではありません。トータルで必要コストを押さえ必要な成果を出さなければいけませんので、そこでの細かな評価手法に関する議論は時間が掛かるので、そのような時間コストをかけずに、担い手変化を進めながら、評価手法についてもそれぞれのサービスに合ったかたちに改善していこうという現実的なアプローチをとっています。

また、具体的な縦割り解消策ですが、「縦割りを解消しよう」と声掛けするようなアプローチはとっておりません。例えば学童保育スペースを貸してほしいという提案が来ると、教育委員会、子ども担当課、保健衛生が担当に該当しますので、三者寄り集まらなければいけません。民間からの提案内容は行政の縦割りにはかかわりなく出されてきますので、その提案に対応するために関係課が議論をする結果として、縦割りを解消せざるを得ない状況をつくり出しています。

河井 それではパネルディスカッションに入ります。

長野県の松尾さんから事業仕分けで頭を使っているというお話がありました。どう対応しようとしているのか教えてください。

松尾（長野県） 今回、アダプトが事業仕分けの対象候補になりました。もともと事務事業評価の中には、有効性・効率性を高める余地があるかの基準があります。長野県にはアダプトシステム協力拡大5か年計画があり、それに対する進捗率が非常に良く全体評価は良かったのですが、まだ有効性・効率性を高める余地があるのでそこを上げていくことになりました。事務事業評価でこれらの点に課題があるとされた事業が仕分けの対象候補と

なるという基準が一つありました。

他方、予算を削るという観点では、市町村に対する補助事業は、今から削ると来年度の市町村予算編成が難しいこともあって仕分けの対象外となるなど、消去法でアダプトが残ってしまったという背景があります。

県の総合計画ではアダプト活動を支援すると明確に言っていますので、我々も主張していきます。これだけの事業規模をボランティアで行い、現物支給だけで済んでいることなどを説明していきたいと思っています。

河井 アダプト活動によって、住民満足度や地域の魅力アップにつながっている。だから意義があるのだという発想はありますか。

松尾（長野県） そういった観点からも説明していきたいと思っています。

河井 岡山市では非常に緩やかに進められているようですが、効果の検証が難しくないでしょうか。

門田（岡山市） 制度の緩やかさが、岡山市のアダプトの強みでもあり弱みであると思います。実際の評価は、参加人数・参加団体数で、何年にどれだけ増やすという目標にとどまっているのが現状です。ニュースレターがありますので、アダプトをやることで意識が高まったとか、地域の人と連携が出来たとか、アンケートをしてみたいと思っています。

県が財政危機で事業仕分け対象をリストアップし、アダプトの補助金がなくなるということになった時、多くの反対や県議からの声も上がって、元通りになったことがありました。

河井 税金でやっているため、事務事業などの人件費については常に問われます。それに応えるために、何人が参加している必要があるのかを考えないといけないと思います。事業仕分けにしても、説明責任という意味で重要だと思います。

地域を一蓮托生のものとして考えておられる永田さんたちは、行政の役割をどうとらえているのでしょうか。

永田（企業） どこの企業も同じような活動を行っていますがその調整役が行政だと思います。私たちはずっと、各々が活動していましたが、磐田市から声が掛からなかったら、まち美化パートナーに入っていませんでした。単に自分たちで活動を続けるだけだったと思います。

私たちがごみを拾い、そのごみを行政がパッカー車で回収してくれますから、かなり活動しやすい環境であり、磐田市との協働だと思います。

河井 市民主導でありつつ、行政もやる気を見せることが重要だということでしょうか。

永田（企業） それは行政だけではないと思います。行政はあくまでも声掛け・まとめ役であり、実際に動く私たち企業や自治会でのリーダーシップ、お互いやる気がない限りは動かないと思います。

河井 坂本さんにお聞きします。今の永田さんのお話を踏まえると、企業が連携をしてアダプト、地域の環境美化で行政に求めるものは何であるとお考えですか。

坂本（企業） 刈り取った草の処分は大変なのですが、それをスピーディーにやっていたくなど、実際の活動で助かっています。また道路に看板を設置させていただいていますが、そこには行政の後ろ盾があることが分かる表記があります。そのことで、単なる民間の活動を越えた重みが伝わっていると思っています。

河井 行政・企業の見解について、岩間さんはどのようにお考えですか。

岩間（ぎふエコライフ） こういった活動は行政だけでは絶対に出来ませんし、企業だけ、NPO だけ、一市民だけでもできません。それが、できる人が、できる時に、できることをやる、お互いが無理せずに連携・協働が出来るストーリーを作れば非常にやりやすいと思います。

河井 門田さんは先ほど強みと弱みの話をされました。今の企業のお話を受けて、行政の強みは何だと思いますか。

門田（岡山市） 行政には信用があると思います。取り組みを広げていく場合、市がやっている制度だから参加しようということも多いので、ありがたく最大限に発揮していきたいと思っています。市民団体なども、それをうまく利用してくれるといいなと思います。

河井 松尾さん、行政の弱みは何ですか。

松尾（長野県） 素早い判断に欠けること、そして法令等に縛られて柔軟性がないということが言えると思います。本県のアダプトは柔軟にやっているつもりですが、そうは言っても一つのくくりの中でやっていることなので、地域の自主的活動に比べると制約はあると思います。

河井 企業はこのような行政の強み・弱みを補完・活用するという発想はありますか。

永田（企業） まず看板です。不法投棄・ポイ捨ては、磐田市道路河川課・まち美化パートナーの名前が入った看板が設置されるだけで、市民の見方が変わってきます。一企業の社名が市内でどの程度周知されているか分かりませんが、磐田市役所であれば誰しも知っています。

ちなみにフットワークの点で、市に不満を感じたことは一度もありません。磐田市のまち美化人口は 12.5% ぐらいですが、なぜ増えてきたかという、市のスピーディーな対応が背景にあると思います。

河井 宮本さんの発表では、制度周知がアダプト・プログラムの大きな問題点・課題だというお話しでした。せっかく行政が持っている強みがうまく生きないのではないのでしょうか。課題・解決策について、食環境として何か考えていますか。

宮本（食環協） 問題点・課題の中で制度周知は毎年上位に挙がっています。一方、その対策といえる維持活性化策ではホームページ活用が約 8 割と圧倒的に高く、その他広報誌・情報誌等、PR を各自治体で工夫されています。協会もホームページを持っていますが、記事を書かせてもそこにアクセスしてもらうための仕掛けがもう一つ必要と思います。自治体担当者の現場訪問がアダプトの拡大につながっているということもあるので、ホームページにとどまらず、人の力が重要だと思います。

河井 岩間さん、行政が何をやっているか伝えるために思うところはありますか。

岩間（ぎふエコライフ） 実は私は、揖斐川町役場の職員です。税務課所属で、こうした活動とは関係のない部署です。こういった活動を続けていくのに大事なものは、ヒト・モノ・カネですが、行政マンがまちづくりのプロとして関わるのは当然のことだと思います。さらに、行政マンが一市民として活動することによって信頼関係がもっと生まれると思います。

平成 5 年に実行委員会を立ち上げ事務局をしていた時も、私は税務課職員でした。ですから市民は、こいつは仕事でやっているのではない、同じ目線でやっている、信頼関係が築けたと思います。

企業からは、私どものやりたいことを提案して、手を挙げていただいています、それも継続の力と信頼関係によるものだと思います。

河井 岡山市のアダプトは個人参加が可能ということですが、そういう方はどういう思いで始められるのか、実際にどのぐらいの参加者がいるのかは分かれますか。

門田（岡山市） 個人参加者は2人です。お二人ともご年配で、昔から自宅の周りを毎日掃除されていた方です。

河井 アダプトを通じて、もともと地域で頑張っている人を発見したということでしょうか。

門田（岡山市） まさにその通りです。立ち上げた時は数を確保するため、知っている団体すべてに声を掛けたと聞いています。最近では口コミで登録されることもあります。

河井 永田さんと坂本さんも、もともとはアダプトだからではなくて、以前から地域で企業の取り組みとしてやられていたということでしょうか。

坂本（企業） もともと定期的に工場周辺の清掃活動をしていました。それがまち美化パートナー制度という行政のお墨付きをもらって、周辺住民にもアピールするなど、うまく制度を活かしています。

永田（企業） 社名に化学と付くので、何をやっているのだらうと思われがちですが、どのような会社かということを示すことにもつながっていると思います。

また、地元採用が多いこともあり、社員は地域密着型、会社も磐田市も好きだという思いが強いと思います。

河井 磐田化学はこんな会社だ、そこで働いている人たちがどういう思いで地域にかかわっているのかを見せていく仕組みとして、清掃活動・美化活動にかかわったと考えてもいいのでしょうか。

永田（企業） そうですね。それまでもずっと独自でやってきたのですが、まち美化パートナーに入ってようやく認知されたという気がします。最初は、大したことをやっているわけではないのでパートナーに入らなくてもいいと思っていたのですが、効果は大きかったと思います。

河井 地域で企業の頑張りを見せていく仕組みとして、アダプトが機能していますね。制度があることによって、自分たちのやっていることを言いやすくなる、市民にも見えやすくなるということでしょうか。

坂本（企業） まさにおっしゃる通りだと思います。企業ですので、やるからには何らか

のメリットが欲しい。私たちの工場は地元で70年操業していますが、これからも地域の方々とうまくやっていきたいという思いが強くなります。清掃活動をやることによって、これから先もこの地で操業しますのでよろしくお願ひしますとアピールしているつもりです。

河井 そういう意味では、今回の制度がきっかけでお隣同士の活動が実現したということですね。

松尾さん、アダプト事業にどんな意味があるとお考えですか。

松尾（長野県） 私たちは、もともとあった道路愛護団体の活動に協定締結による支援制度を設け、広がってきました。試行段階では県から声掛けをしましたが、最近では協定団体の活動を見て支援制度があることを知って、新たに協定締結を申し込む団体が増えてきており、活動に広がりが出てきています。

河井 行政側には、経費削減とか登録目標団体数を十分にクリアしているという効果の報告がありました。他方、行政がかかわることで活動を見える化をするなど、活動者の効果はいかがですか。

松尾（長野県） 私たちの目標は道路美化ですが、成果をホームページでご紹介したり、表彰したりすることによって、知ってもらいきっかけを生み出すことが出来ると思います。やる気を継続していただけるような支援をしていきたいと思っています。

河井 門田さん、岡山市の目標というのは何なのでしょう。

門田（岡山市） 環境美化が中心の目的ではありません。世界で起きている環境問題を自分のこととして感じてほしい、ごみ拾いがそのきっかけになればいいと、アダプトを設けています。ですから、美化効果や費用対効果は調べていません。アダプトに参加した人がどう変化・成長したかを、アンケートなどで調べてみたいと思います。

河井 松尾さんは美化が目的だということですが、物件費で提供用具費が2,500万円など、結構お金がかかっていますよね。単純に費用対効果が目的ではないと思うのですがどうでしょうか。

松尾（長野県） 費用対効果は副次的なものです。ただ、この事業を始めた当初は、財政的に維持管理費が厳しくなっていて、そういう観点も必要だったと思います。

河井 会場から岩間さんに質問が来ています。ボランティアでやるものと、お金のやり取

りが出てくるもので、住み分け・判断はどのようにやっているのでしょうか。

岩間（ぎふエコライフ） エコライフ推進プロジェクトは、環境省の3R推進モデル事業の委託事業で、費用は100%出ています。ヒト・モノ・カネの中でNPOが一番困るのはお金の部分ですから、しっかりと企画書・物語を作りいかに費用を得られるか、準備しないとなかなか難しいと思います。

事例紹介しました空き容器回収機ですが、2台で640万円です。NPOが大金をどう用意したんだと聞かれますが、あれは東海地方初の環境の駅の立ち上げで、マスコミの注目度も高いのでいいPRになると、滋賀県のTMエルデ（株）から無償貸与されました。

それと堆肥化ステーションの生ごみ処理機も2台で2,500万円です。これは四国で作っている機械ですが、代理店は岐阜県大垣市にあり、動いているところを見せる機会が欲しかった企業と、思惑が一致して、（株）ジーシーから無償譲渡していただきました。

カネは非常に難しい問題ですが、うまく連携・協働していけば、NPOとしての活動展開ができると思います。

河井 物語を作るというのはすごくいい言葉だと思います。

職員にやりがいを感じてもらおうというお話もありましたが、パネリストの皆さんは、今の活動に対してやりがいがあるのでしょうか。

坂本（企業） 正直、夏は暑くて汗びっしょりですし、作業自体はそれほど楽しくありません。しかし、ウォークラリーなどが新聞で取り上げられると、社員にとっては励みになります。社員の家族にも、喜びや誇りを持ってもらえるようです。そういう意味では、たまたま記事に取り上げていただいたことがご褒美になったと思います。

河井 もうちょっと頑張ろうという気持ちになるのでしょうか。

坂本（企業） 難しい面もあります。工場の北側の道路だけアダプト登録をしていたので、東側も登録しようという話になった時、範囲を広げるのは大変だという意見もありました。現在、分担してうまくやっていますが。

河井 やりがいにつながることも大事ですが、無理をしても続かないということですね。

坂本（企業） 大したことをやっているわけではないので、無理をしないで継続していきたいという思いがあります。

河井 永田さんはいかがですか。

永田（企業） 楽しいですよ。活動は、上司部下や部門部署を超えることができます。一堂に活動するという機会は他にないので、コミュニケーションが図れます。このコミュニケーションは、日本アルコールさんとの関係においても出てきて、どんどん広がっていくのが楽しいです。

本業とは関係ないと思われませんが、実はまち美化・清掃活動は本業につながっています。5S活動は最終的にはクオリティにたどり着きます。5Sが出来れば品質の良いものが出来ると思っていますので、ずっと続けていくべきだと思います。

河井 アダプトというのはまちを綺麗にするだけにとらえられがちですが、実は企業にとっても新しい発見が生まれることがあるのだと思います。

岩間さんはいかがですか。

岩間（ぎふエコライフ） NPO活動をやっているのと、いろいろな職種の方とお会いすることができます。さまざまな考え方や、やり方・手法をうまくコーディネートしていくことによって、新たなものが生まれます。新たなものが生まれると、みんながやる気になります。

エコライフプロジェクトの851店舗には、1軒1軒実行委員会のメンバーが回りました。1人の力では絶対にできないことですが、できる人が、できる時に、できることをやる、というスタンスによって、初めて一つの大きなうねりになったと思います。

あまり無理をしないことが非常に大切ですし、企画書もいろいろな人の意見を聞いて、物語を作り上げていくということが必要だと思っています。

私のモットーは、ノミネーションです。飲んだ時は、みんなが朗らかになって、本音が出てきます。それを頭の隅に書き込んでおいて、上手に活かしていければと思っています。

河井 門田さんはいかがでしょう。行政の立場として楽しみが見つかるところはありますか。

門田（岡山市） 半々でしょうかね。楽しかったことと言えば、Cultureという若者グループと地元町内会をつないだ時、町内会のおじさんたちがみかんを差し入れているほほえましい光景を見て、いいことをしたなと思ったりします。最近は定期的にニュースレターとか交流会で発表の機会を作っているので、団体の皆さんと話をしたり、また頑張っただけでやらないといけない気になったと言ってもらったりすると、楽しいなと思います。

本市は、磐田市のようにパッカー車ですぐに取りに行くような仕組みがないものですから、集めたごみ処理の問題が時々出てきます。誰が処理するか、県と市の分担、その辺が

悩ましい部分ではあります。

河井 やりがいにつながりそうでも、制度設計が甘いとうまくいかないと思います。ごみの回収が、制度として用意しておけば、連絡一本で済むわけです。そこではトップが住民満足を想像することが重要だと思います。トップの明解なコミットメントが重要だという川島さんの指摘につながるかもしれません。

松尾さんは楽しいですか。

松尾（長野県） 実は今週末に中野市で美化活動があり、私も一緒に活動する予定です。道路は通過交通のためだけにあるのではなく、地域住民にとっては生活空間の一部ですので、道路の美化活動は、地域に愛着を持つことにもつながってくると思います。

中野市の参加者には高校生も高齢者もいるので、世代間交流が図れるといったこともあります。単純に、作業をして綺麗になった満足感が得られれば、それもやりがいにつながると思います。

河井 綺麗になる、交流が進む、頑張っている人たちをしっかりとらせていく、この三つが大事なかなと思いました。

門田さんにお聞きします。岡山市では継続的にかかわりたいと思わせる上で必要なものについて何かお考えはありますか。

門田（岡山市） それが交流会とニュースレター、そして表彰だと思っています。そういった形で広くいろいろな人に紹介をしてあげて、活動を褒めてもらったりすると励みになるようです。行政だけではなく、通りすがりの人なども声を掛けてくれるのが一番の励みになると皆さんおっしゃいます。

大阪府が笑働の三つのキーワードで、参加・伝える・感謝というのがありましたが、まさに感謝を表すことが笑働ということで、それが一番の原動力だと思います。

河井 大阪の感謝の地域づくり、笑働という発想はすごい考え方だなと思います。大阪府は、感謝の制度化というか、啓発なのでしょうか。具体的にこんなことを考えているということがあればご紹介ください。

大阪府 出来る時に出来ることを出来る人がやるので、協働のごみ拾いの活動に参加出来なくてもできることがあるんです、という啓発を今やっつけていこうとしています。

河井 アダプト・プログラムの維持活性化施策には、感謝状や認定証から、広報誌やアダプト情報誌みたいなものがありますね。実はこういうものは、単純に制度を知らせるだけ

ではなくて、次の人を育てていくということ、それを主眼にした事業だとも読めると思います。

食環協では、人をどうやって褒めていくのか、評価し、伝え、いろいろな人からのありがとうを呼び込むために、何かやっていることはありますか。

宮本（食環協） 残念ながらまだ考えていません。今まではアンケートなどで単に〇〇をやっていますか？という聞き方だけだったので、もう少し深く聞くようにしたいと思います。

河井 坂本さん、永田さんのお話は非常に興味深く、制度によって見えて活動が見えてきたと。今度はその見えてきた人たちに対して、どうやってありがとうを伝えていくかが大事だと思いました。

再び会場からの質問です。ボランティア活動において、交通事故などが発生するリスクを行政はどのように考えているのか、保険加入以外に何か行っていることはありますか。門田さん、いかがですか。

門田（岡山市） 正直、交通事故のことは考えていませんが、草刈りで石が飛んできてけがをしたなど、ボランティア保険を適用することになった事例は1~2件あります。もともと岡山には国・県のアダプトがありますが、国道のような交通量が多い場所は国がしっかりやっています。県は河川をきっちりやっています。それ以外の部分を岡山市が引き受けているので、危険な場所での活動はあまりないというのが現状です。

河井 次の質問です。清掃活動の支援だけでなく、ごみを捨てない啓発をしていますか。松尾さん、いかがですか。

松尾（長野県） 不法投棄は問題になっていますが、道路管理者としては有効な手立てはなかなかありません。現在は、最終的に投棄者が特定できないものは道路管理者が事業系一般廃棄物として処理しています。個人のモラルの問題でもあり、今のところ、看板掲示ぐらいしか手立てが見つかっていません。

河井 アイディアはありますか。

坂本（企業） 磐田市内の中学校生徒会の活動で、ごみを拾いながら登校している事例があります。小学校・中学校の頃からそういう活動することによって、大きくなってごみをポイ捨てしない、自分たちの地域はいつも綺麗にしていきたいという、ちょっと長期的ではありますが啓蒙活動になると思います。

河井 最後に、食環協として今後どう進めていくのかお聞かせください。

宮本（食環協） 私ども食環協では、散乱防止の啓発は事業の柱の一つで、啓発ポスターや環境教育などの施策を行っています。また、アダプト・プログラム研究会で色々なテーマで研究を進めています。アダプトの効果について、ポイントになるものを今後まとめていきたいと思っています。